

2024年3月20日（水・祝）10：00～15：00
早稲田大学先端生命医科学センター

クロージング・フォーラム

デュアルユース研究を通してつなげる・つながる

京都大学 iPS細胞研究所
上廣倫理研究部門 特定准教授
三成寿作

「同じ科学・技術でも、その使い方により、人類の福祉と社会の安全に貢献する場合と、目的によりそれを損なう場合がある。このことを意味するデュアルユース（dual use）という言葉の意図を的確に表現する言葉として『用途の両義性』を提案する。」

報告『科学・技術のデュアルユース問題に関する検討報告』

2.(3) 「デュアルユース（dual use）の定義とこれに対応する日本語」

日本学術会議「科学・技術のデュアルユース問題に関する検討委員会」

平成24年（2012年）11月30日

厚生労働行政推進調査事業費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）
「新型コロナウイルス感染症を踏まえたデュアルユース性が懸念される
公衆衛生研究の国際動向及び倫理規範・監督体制確立のための研究」
（ReDURC, 2021～2023）

デュアルユース研究（DURC）：
社会的観点から用途に懸念が生じ得る科学技術を用いた研究

第一部：社会、アート、ガバナンス、職業倫理

10:00～11:00

発表者：

三成 寿作 (京都大学 iPS細胞研究所・特定准教授)

吉澤 剛 (関西学院大学・客員研究員)

四ノ宮 成祥 (防衛医科大学校・学校長)

花木 賢一 (国立感染症研究所・安全実験管理部長)

◇11:00～11:15 ネットワーキング

第二部：生命倫理、コミュニケーション、科学、公衆衛生

11:15～12:15

発表者：

河原 直人 (九州大学病院・特任講師)

川本 思心 (北海道大学 大学院理学研究院・准教授)

木賀 大介 (早稲田大学 理工学術院・教授)

齋藤 智也 (国立感染症研究所 感染症危機管理研究センター・センター長)

◇12:15～12:30 ネットワーキング

第三部：招待講演

13:30～14:00

発表者：

岩崎 秀雄 (早稲田大学 理工学術院・教授)

茜 灯里 (文筆家／科学ジャーナリスト)

◇14:00～15:00 パネルディスカッション

異なる専門領域をつなぐコミュニケーションの可能性

Bridge the Gap 2001：ワールドシンポジウム北九州

開催日：2001年7月24－27日

一般公開レクチャー（定員：460名）：7月24日

カンファレンス（定員：75名）：7月25－27日

登壇者：芸術、科学、社会学、都市計画等の領域の専門家

主旨：科学と文化の接続を目指す交流の場の創出

主催：ワールド・シンポジウム北九州実行委員会
（北九州市、CCA北九州、等）



登壇者：マリナ・アブラモヴィッチ（アート），**有馬朗人**（物理学），
 オラデレ・アジボイエ・バンボイエ（アート），ステファノ・ボエリ
 （建築・都市計画），ジョン・キャストイ（複雑系），グレゴリー・
 チェイティン（数学），チャン・ユンホー（建築・都市計画），
オラファー・エリアソン（アート），ケリス・ウィン・エヴァンス
 （アート），エヴリン＝フォックス・ケラー（科学思想史），
 カーステン・フラー（アート），**池上高志**（複雑系），
レム・コールハース（建築・都市計画），**国武豊喜**（高分子化学），
 サンフォード・クウィンター（哲学），マーク・レオナード（政治学），
 ウィリアム・リム（建築・都市計画），サラット・マハラジ（美術史），
茂木健一郎（認知科学），イズラエル・ローゼンフィールド（脳神経学），
 サスキア・サッセン（社会学），リュック・スティールス（人工知能），
 ワン・ジャンウェイ（アート），アントン・ザイリンガー（量子物理学）

https://cca-islands.org/archives/publication/m20010000_btg_pgm/

性と感性が大規模に集う「賢人会議」です。
 芸術、社会学などにおける第一人者が同じ
 ルにつき、現代社会の課題を創造的に議論す
 ます。

社会のパラダイムの転換を問いかける本
 の成果は、21世紀の世界を先導する指針を
 示すものです。

界を超えて対話を行うシンポジウムとしては、世界
 ップレベルのものを目指し、新たな手法を試みます。

● 同種のシンポジウムで、世界
 タッフが社内スタッフと共に企画、運営に参画します。

● この事業は、国内外の大学や企業の教育・研究機
 関がまったく新しいシステムのもとで、頭脳交流
 を行う「北九州学術研究都市」のオープンを記念
 して開催するものです。

平成13年7月24日(火)～27日(金)〈4日間〉

■ 一般公開レクチャー (参加無料)
 【日英同時通訳】

期日 平成13年7月24日(火) 10:00～16:45

会場 北九州学術研究都市会議場
 (北九州市若松区ひびきの2-3)

定員 460人(申し込み多数の場合は抽選とします)

内容 パネリストのうち10人が、翌日からのカ
 ンファレンスの導入部分として30分ずつ
 のレクチャーをおこないます。
 これらのレクチャーはシンポジウム全体の
 ダイジェストとして一般公開します。

講師 アントン・ザイリンガー(量子物理学)
 レム・コールハース(建築・都市計画)
 ブルーノ・ラトゥール(社会学)
 サスキア・サッセン(社会学)
 カーステン・フラー(アーティスト)
 グレゴリー・チェイティン(数学)
 ジョン・キャストイ(複雑系)
 エヴリン・フォックス＝ケラー(科学思想史)
 ブレース・マウ(グラフィック・デザイン)
 リュック・スティール(コンピューター・サイエンス)

■ カンファレンス (参加費25,000円)
 【日英同時通訳】

期日 平成13年7月25日(水)～27日(金)〈3日間〉
 10:00～16:15

会場 西日本工業倶楽部(北九州市戸塚区一棟1-4-33)

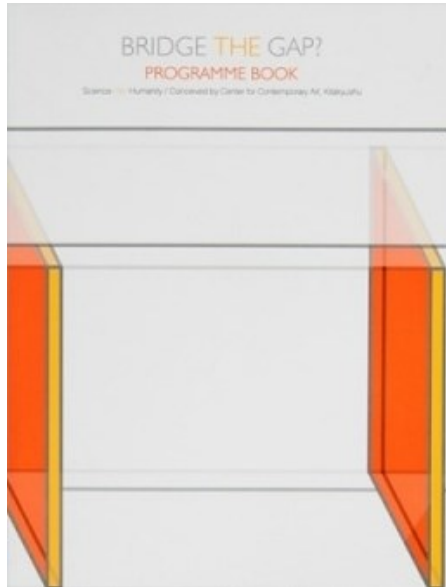
定員 75人(申し込み多数の場合は抽選とします)

内容 芸術、科学、社会学、都市計画などの各分野
 代表する賢人が集い、社会の仕組みやモラ
 価値観などの枠組み(パラダイム)を問い直
 創造性豊かな世界を実現するために
 を超えた対話の中から21世紀の社会
 方を探ります。

・2～3人のパネリストが対話形式
 治った議論を行います。
 ・参加者はパネリストとの討論
 (1日3セッション)

テーマ 7月25日 「時間、不確定性」
 7月26日 「経済的格差、
 グローバル
 7月27日 「ギャップ・+

一般公開レクチャー	7/24(火)	①	②	③
カンファレンス	7/25(水)	①		
カンファレンス	7/26(木)	④		
カンファレンス	7/27(金)	⑦		



https://cca-islands.org/archives/bridge_the_gap/20010724_btg_01/

Bridge the Gap?

1. アーティスト、科学者、デザイナー、人文科学の研究者が集い、
**異なる考えやそれぞれの分野に根づく価値観を尊重しながら、
学際的な探求の中でアイデアを交換し、触発しあう現在進行の場をつくる**
2. コーヒーブレイクを話し合いの中心的な場にする
3. 知識が生み出すものに対し、枠組みやヒエラルキーのないものの見方を提案・・・
4. **分野の境界線を超え、知識が蓄えられることの生み出す恐れを超えていく・・・**
5. 伝統的なコンファレンスは秩序と安定を強調するもの・・・
6. 反対に、私たちは今、**変動と不安定、つまり予測できないものを見る・・・**
7. **30人に及ぶアート／科学／人文学の専門家たちを招いて2001年に北九州で開催・・・**

2011 ELSI Congress: Exploring the ELSI Universe

開催日：2011年4月12～14日

参加者：350名程度（主に人文・社会科学系の研究者）

主旨：ゲノム研究における倫理的・法的・社会的含意（ELSI）への検討

主催：ノースカロライナ州立大学

研究資金：米国国立衛生研究所国立ヒトゲノム研究所（NIH/NHGRI）



8:45 a.m.	Plenary: The Landscape of Genomics	Grumman
9:30 a.m.	Plenary: New Perspectives on Genomics & Health Equity	Grumman
10:30 a.m.	Break/refreshments	Atrium
11:45 a.m.	A. Concurrent Sessions (8 from which to choose)	
	• A-1 Panel: Justice in Translation: Achieving Benefit for All from Genomic Science	Dogwood
	• A-2 Panel: Research on the Genetics of Antisocial Behavior and Violence: Implications for Social Control and Criminal Justice	Sunflower
	• A-3 Panel: A Next Generation of ELSI Research: The Human Microbiome Project	Redbud A
	• A-4 Panel: Ethical and Legal Implications of Return of Research Results to Participants in Biospecimen Studies	Redbud B
	• A-5 Themed Papers: Community Issues	Bellflower
	• A-6 Themed Papers: The ELSI Enterprise	Windflower
	• A-7 Themed Papers: Public Rhetoric	Mountain Laurel
	• A-8 Themed Papers: Concept of Race	Azalea

「明るい成果だけを社会に宣伝するのではなく、
事前に暗い可能性をも知らせ、
社会からのフィード・バックがかかるようにしておく。
とくに、暗い面や潜在的危険性は
最先端の専門的科学者でなくては想像できないことが多い」

『人間の終焉』（渡辺格），1976

「あまりにも変化の速い、混迷の現代に生きる私たちは、
その時々多数意見を鵜呑みにするのではなく、
未来に対する真剣な憂慮に根差す少数者の意見にも、
耳を傾けることを怠ってはならないであろう」（1971年，64歳）

『湯川秀樹 詩と科学』（湯川秀樹），2017

科学技術に関する知識に関しては専門家・有識者の担う役割が多い一方、社会的な価値のあり方については一人ひとりが重要な役割を担い得る。



『トラタのりんご』（画家: Nakaban）

岩波書店（2023年3月20日）

2024年2月5日 北海道新聞

【<こどもの本棚 ○○な本ありますか？>テーマ「りんご」】

2023年12月20日 松本経済新聞

【松本の書店で絵本「トラタのりんご」原画展
光のまぶしさや生命力感じる作品】

2023年4月30日 産経ニュース

【『トラタのりんご』nakaban作】

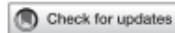


『曖昧で確かなもの』（tupera tupera）

（2023年, カサネグラフィカ、78.9 × 59.2 cm）

2024年2月20日 文教速報デジタル版

【生命科学と社会をテーマにした絵画「曖昧で確かなもの」京大iPS研が無料公開】



OPEN ACCESS

EDITED BY
Segaran P Pillai,
United States Department of Health and
Human Services, United States

REVIEWED BY
Gerald Epstein,
National Defense University,
United States
Dana Perkins,
United States Department of Health and
Human Services, United States

Reconsidering the need for gain-of-function research on enhanced potential pandemic pathogens in the post-COVID-19 era

Nariyoshi Shinomiya^{1*}, Jusaku Minari², Go Yoshizawa³,
Malcolm Dando⁴ and Lijun Shang^{5,6}

2022/8



Pathogens and Global Health

ISSN: (Print) (Online) Journal homepage: <https://www.tandfonline.com/loi/ypgh20>

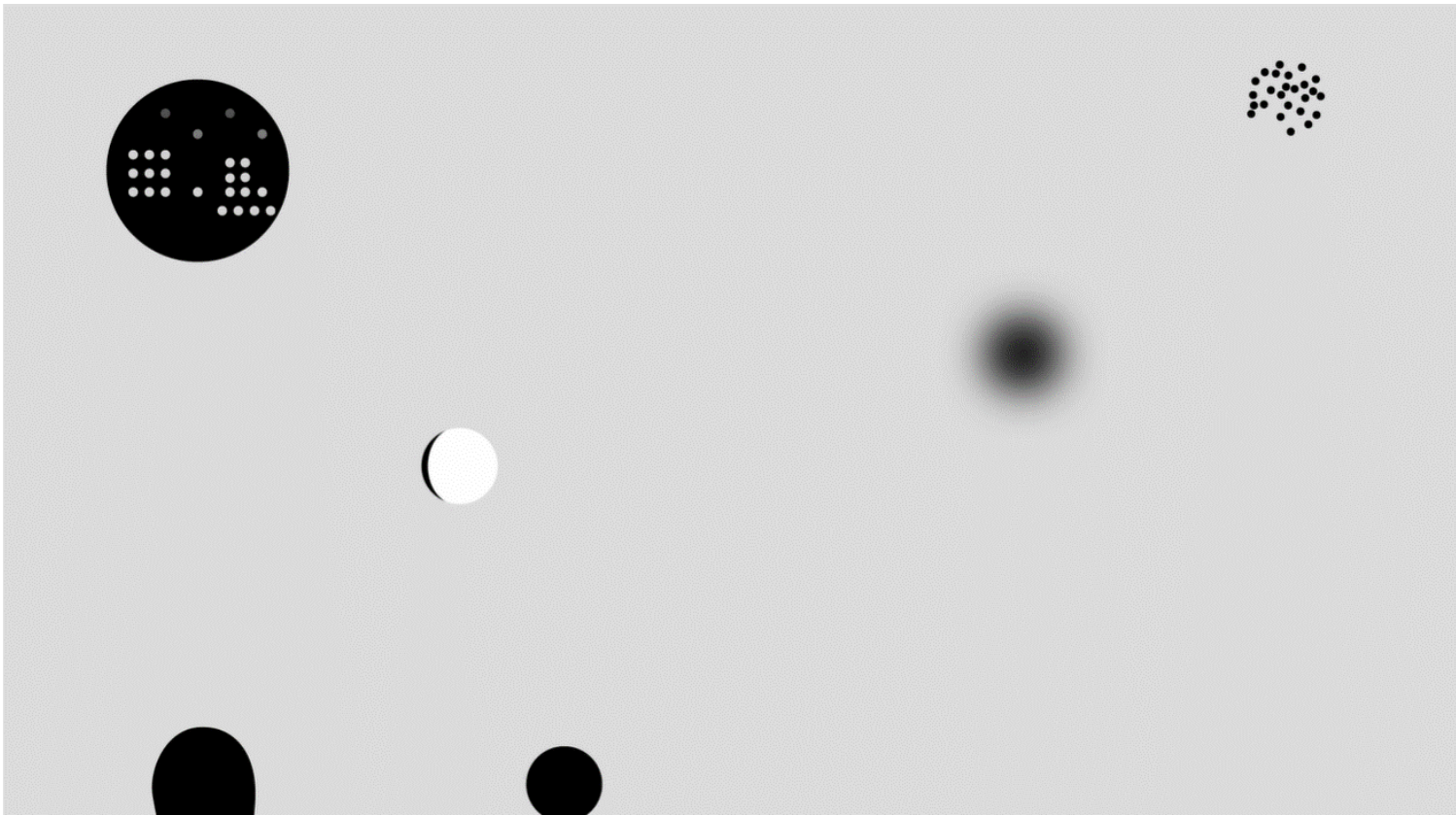
Limiting open science? Three approaches to bottom-up governance of dual-use research of concern

Go Yoshizawa, Nariyoshi Shinomiya, Shishin Kawamoto, Naoto Kawahara,
Daisuke Kiga, Ken-Ichi Hanaki & Jusaku Minari

2023/10

『合成生物学は社会に何をもたらすか』
編著 島菌進／四ノ宮成祥
著 木賀大介／須田桃子／原山優子
専修大学出版局（2022年5月6日）

朝日新聞（朝刊）掲載記事
「ウイルス改変研究 有用かリスクか」
三成寿作／四ノ宮成祥
（2021年12月7日）



<https://www.redurc.com/stories>

日本デザインセンター

01 あの目この目

02 止まることも進むこと

03 わたしは社会、社会はわたし

04 その手のなかにも

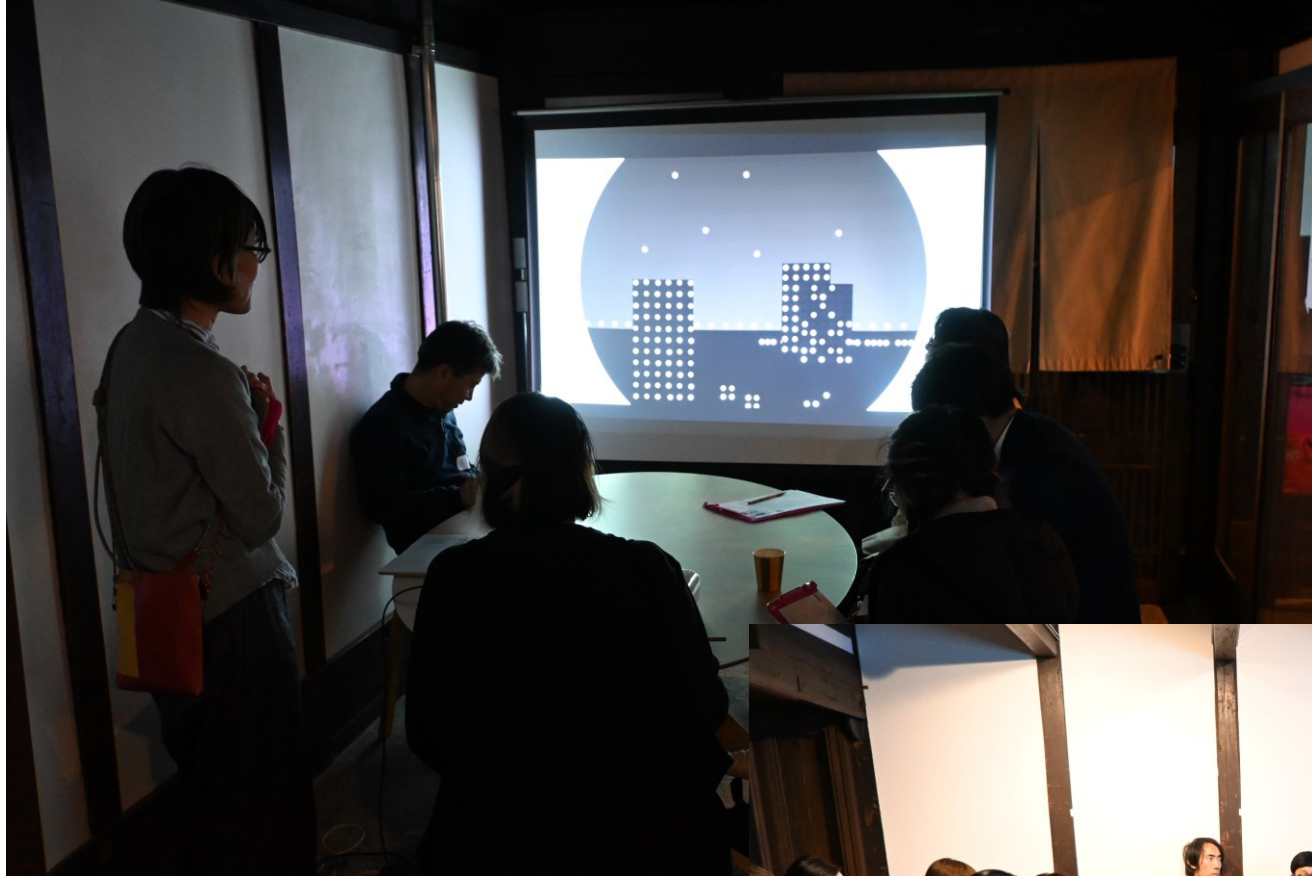
05 情報の落穂拾い

06 361度から見る

Small world:

(Mis)Information is flying around:
Intersection of time and places





ここからどう進む？

対話型鑑賞の

これまでと

これから

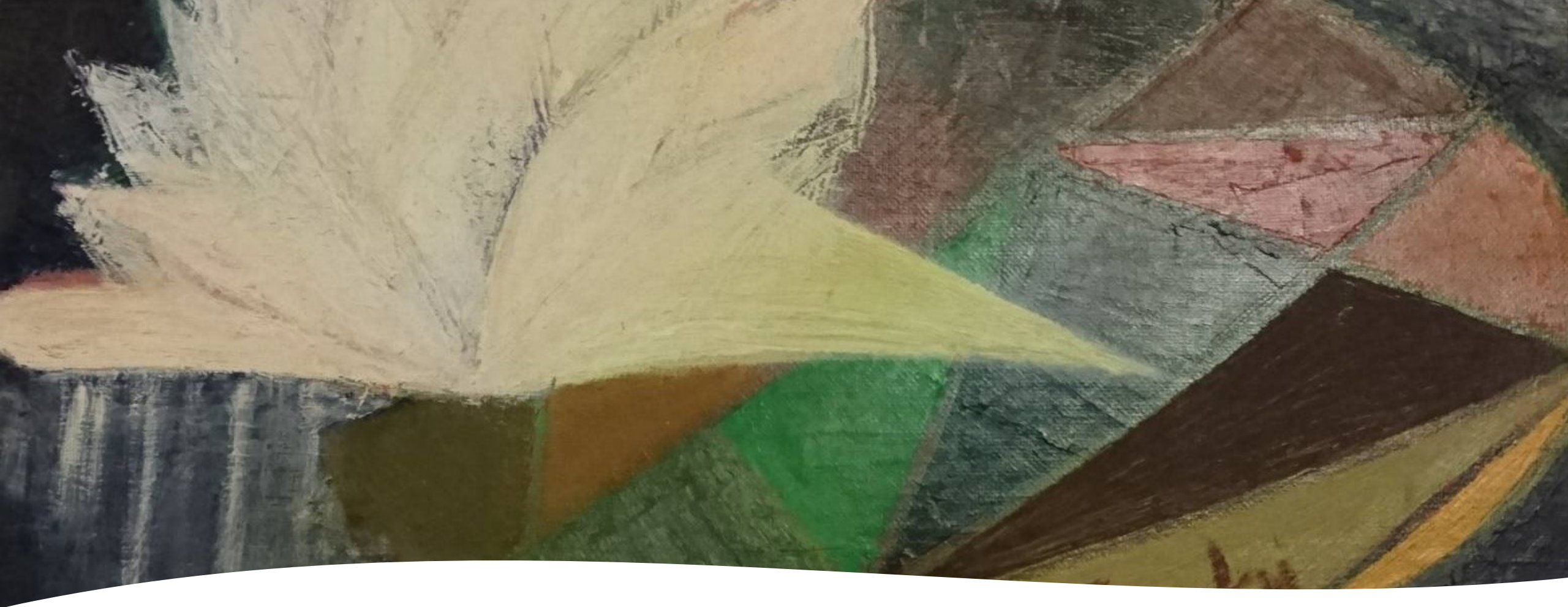
アート・コミュニケーションの可能性

30年のうちに変容してきた「対話型鑑賞」を
多角的、学際的に議論しつくした全8章。
みえてきたもの、みえなくなったものとは……。

淡交社（2023年9月4日）
第4章
科学/医療と対話型鑑賞

監修 京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター
編集 福のり子・北野 諒・平野 智紀

淡交社



**デュアルユース研究のあり方への多面的アプローチ：
学術における隙間領域の接合（Bridge the Gap）**